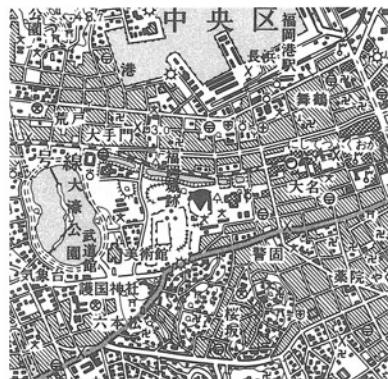


2006年出土の木簡



(福岡)

福岡・鴻臚館跡

こうろかん

所在地 福岡市中央区城内

2 調査期間 第二二次調査 二〇〇三年(平15)四月~二〇〇四年三月

3 発掘機関 福岡市教育委員会

4 調査担当者 大庭康時

5 遺跡の種類 官衙跡

6 遺跡の年代 七世紀後半~一世纪前半

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

鴻臚館跡は、古代国家が筑紫・難波・京の三カ所に設けた对外公館である鴻臚館のうち、筑紫鴻臚館の遺跡である。

七世紀後半の「筑紫館」を初見とし、一世纪中頃の「大宋国商客宿坊」まで、迎賓館から貿易拠点へと性格を変えつつも古代国家の対外窓口として機能し続けた。一九八七年の国史跡福

岡城跡現状変更に伴う発掘調査で発見されて以来、福岡市教育委員会によって計画的な確認調査が継続されている。
これまでの発掘調査で、鴻臚館の客館部分は、自然の谷を挟んだ北と南の丘陵上に並列的に営まれたことが明らかとなつた。
今回の調査では、北館の壝区画南東隅の外側に掘られた八世紀中頃の便所遺構SK一二四から、木簡一点が出土した。SK一二四の下層は排泄物の堆積層で、大量の籌木などが捨てられており、木簡はその中に含まれていた。他にも付札やその断片が出土しているが、文字を伴うものはなかつた。

鴻臚館跡では、第五・六次調査において、南館の便所遺構SK五七からも、木簡がまとまって出土している(本誌第一三号)。

8 木簡の釈文・内容

(1) □ □

(18)×(109)×6 081

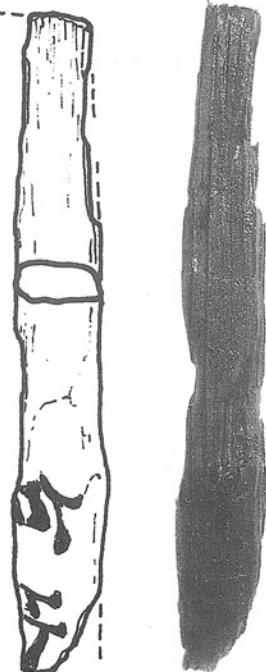
板目材の横材の木簡の断片で、少なくとも二行の文字が書かれている。一行目の部首は竹冠、二行目はなべぶたと思われるが、文字を特定することはできない。

9 関係文献

福岡市教育委員会「鴻臚館跡一六」(福岡市埋蔵文化財調査報告書八

七五、二〇〇六年)

(大庭康時)



切り込みはどちらから?

(財)徳島県埋蔵文化財センターの大橋育順さんと、面白い議論をした。

荷札木簡などの切り込みをよく観察すると、加工の順番がわかることがある。刃の痕跡の深さに差がある場合、深い方が最初に入った刀である。刃物には厚みがある。後から入れた方は、刃の厚みによって木が外に押し出されるから、最初の刀の深さに至る前に木がはずれてしまう(左図参照)。

ここまで意見が一致した。大橋さんはさらに、木簡の端部に近い方からまず刀を入れるはずだ、という。観察結果もそうだし、理論的にもそうしないと切り込みがうまくできない。だが、逆だと考えられる例も平城京木簡にある(京三一四九三二)。また、がたついた刀の痕跡が残る場合など、刀を入れ直したと認められる場合はさらに個別の検討が必要である。たがが切り込みされど切り込み。まだまだ謎が多い。

(馬場
基)

刃の厚みによる力が発生する。より木の圧縮により残り吸収された力が、木を押し出す。

